

## 歴史的研究における量的分析の可能性とその限界

### ーテキストマイニングによる原崎秀司の思想的特徴を事例としてー

○ 帝京平成大学 中嶋 洋 (5048)

キーワード: 研究方法、テキストマイニング、原崎秀司

#### 1. 研究目的

歴史研究の分析手法では、史料や聞き取り調査結果などの質的データの分析が鍵となる。しかしながら、そうした質的データですら、「引用されている素データがたまたま研究者の目にとまったものなのか、それとも大量の資料を精査した紛れもなく典型的なものとして選ばれたのかといった疑問の数々が曖昧なまま残されている」と批判され(樋口 2006:8)、科学的根拠の明確化が求められる。吉田・岡田(2000:5-6)は、「社会福祉は、歴史的社会的に生じる矛盾や課題を生活者として背負い、一生懸命に悪戦苦闘する生きた人間を対象とする」としているが、人物を中心対象とする歴史研究において、関係性や自己を捉え直す方法を何に立脚しながらどのように探究すればよいであろうか。一方、検討素材である史的価値のある日誌・記録物の類いであっても、それは個人の意見に留まっており、歴史的・社会的なものに十分なり得ていない。すなわち、科学を媒介にし、認識や世界観に昇華させ理論化する作業へとつなげることが今後一層重要であると考えられる。従来、歴史研究の成果として示された史料やデータは第一次資料としては価値があるものの、その裏打ちが不十分であることから客観性や妥当性の担保が課題とされる。故に、質的データに科学的根拠をもたらす分析方法の検討がもっとなされてもよいのではないだろうか。

このような問題意識の下、本発表では、社会福祉分野の歴史的アプローチの手法を再考することを旨とし、従来、量的分析の対象になり難かった質的データ(歴史研究の成果の一端)に対し、量的分析手法を用いることで、その科学的根拠を導く可能性及び限界を検証することを目的とする。

#### 2. 研究の視点および方法

社会科学としての分析を成り立たせるためには、「その社会現象としての広がりをもつ事実を客観的に理解できる実証主義的方法をとるとともに、その現象を内包する人間にとっての根拠や理由を明確にする抽象的な規範や理念を追求する普遍主義的方法を積み重ねる必要がでてくる」(池田 2011:11)と指摘される。本発表でもこうした実証主義の視点に立ち、質的データに対し量的分析を試みる。用いる質的データは、長野県社会部厚生課長(当時)として欧米社会福祉視察研修に臨み、日本で最初にホームヘルプという制度の創案をつくり、長野県でいち早く事業展開していった原崎秀司の日誌(3冊)及び論稿(2本)とする。量的分析手法は、近年注目され、内容分析(content analysis)に依拠した計量テキスト分析(「テキストマイニング」と総称する)を用いる。この検討により、質的データである歴史的資料を計量的に分析し得る可能性とその限界を明確にすることを試みる。

### 3. 倫理的配慮

原崎の日記・論文の使用許可を原崎の長男 原崎修一氏から 2009（平成 21）年 8 月 3 日に得るとともに、登場する固有名詞や私的事項についてもケースの本質を失わない範囲で粉飾するなどの配慮をした。加えて、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守した。

### 4. 研究結果

テキストマイニングを用いて、原崎に関する原資料を分析したところ、以下の結果が得られた。まず、すべての質的データを対象とした上で、頻出語リスト（頻語 40 語）を抽出し、階層的クラスタ分析を行った結果、＜欧米社会福祉視察研修＞＜故国日本への回顧＞＜公務労働と方面事業＞＜わが子の成長＞＜家庭生活と県民生活＞＜妻への配慮と読書＞の 6 つのクラスタに分類できた。次に、共起ネットワークにより、原崎の思想的特徴を検討し、「思う」「社会」「出来る」という言葉を基点にした言葉のネットワークが可視化し得た。さらに、対応分析により、言葉の類似性や共通性を検討したところ、「欧米視察」「自省」「仕事と生活」「方面事業」という 4 群に分けられ、それらは「仕事と生活の一体化」「解決方法の模索」という基軸に基づいて配列されることが明らかになった。

### 5. 考察

わが国のホームヘルプ事業史上のキーパーソンである原崎の思想が表れる日記・記録物などの質的データに対する量的分析というアプローチは、従来のような単なる記述内容の切り取りや要約に留まらず、推論（inference）を可能にした点で一步前進した。さらに、データの妥当性を損ない得るといった危険性が低い点でも有効である。それは、研究者の主観に依存した「頻繁に」「滅多にない」などといった表現よりも正確かつ厳密であり、原崎を巡る思想の類型化・体系化に寄与している。但し、こうした量的分析がすべてを解明し得るわけではなく、得られるものと失うものとの兼ね合いについてもより追究しなければならない。「研究の方法論が違えば、そこでは個別科学間の限界が補われるという側面と、どの科学の研究方法論にも適合せず、研究の網の目から取り残されてしまうという側面がうまれてこざるをえない」（古川 2004:59）と指摘されるように、後者が限界点でもある。しかし少なくとも、歴史研究において、旧来のように量的分析と質的分析とが相容れない排他的なものや盲目的に位置づけるのではなく、むしろ両者の積極的な活用を通じ、循環的關係のなかから新たに見えてくるものを探究することが重要ではないだろうか。対象の多様化やデータの増加などにより、批判的視点からのより精緻な検討が求められる。

#### <引用文献>

古川孝順（2004）『社会福祉学の方法』有斐閣。

樋口耕一（2006）「内容分析から計量テキスト分析へ——継承と発展を目指して」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』32,3-27.

池田敬正（2011）『福祉学を構想する』高菅出版。

吉田久一・岡田英己子（2000）『社会福祉思想史入門』勁草書房。